

# 中学校における授業改善のための校内研究の充実

## — 教員への意識調査を通じた「校内研究推進メカニズム」の追究 —

関 井 隆 志

相模原市立小山中学校

### 要 約

授業研究の文化は、義務教育制が施行されて以降発展してきた。しかし現代において、教員が研究を行ううえで様々な課題がある。一方で各学校では、教員の授業力の向上につながるような校内研究を推進するように努力している。本研究では、中学校教員に対して2つの意識調査を行い、授業力改善のための校内研究を充実させるための条件と要素を検討した。そして、統計解析の結果をもとに「校内研究推進メカニズム」を提案する。さらに生成した「校内研究推進メカニズム」を好作用させ、中学校における校内研究を充実させるための具体的な方法を提案する。

キーワード：中学校 授業改善 校内研究 教師教育 教員の力量形成

## 1. 課題意識と研究の目的

日本の教育において授業研究の文化は義務教育制の施行より発展してきた。互いに授業を公開し、研究協議を通して授業力を向上させていくという日本の学校文化は世界にも発信されている。授業研究は日本の学校教育にとって世界に誇ることができる文化である。しかし、現代の授業改善に関する研究は渾然とした状況である。脇本（2015）は授業研究が十分に行えない理由について、①「教師の年齢構造の変化」、②「教師の多忙化」、③「子どもと保護者の変化」の3点の教員の実情に関する変化を指摘している<sup>1</sup>。特に「教師の多忙化」という面においては、部活指導、生徒指導、進路指導など、授業以外の分野における指導に教師は多忙感を感じ、授業の改善と研究にまで手が回らないというのが現状である。

教員にはこのような現状を乗り越え、授業研究を充実させることが求められている。そして校内研究の推進の方法については数多くの先行研究で示されている。坂本（2010）は、授業研究の事後協議会に

における教員の省察過程についての研究を行った<sup>2</sup>。また杉江（2017）は犬山市の小学校の実践例を元に、教員による協同的な学び合いを軸とした校内研修のモデルを示した<sup>3</sup>。

しかし、中学校における授業改善のための校内研究における現状と課題、その解決方法に関する研究は十分に行われているとは言えない、そこで本研究は、中学校の教員の授業研究についての意識調査を行い、そこから授業力改善のための校内研究を充実させるための条件と要素を明らかにすることを目的とする。また、それらの要素の相関関係を追究することとする。

## 2. 面接調査

研究の趣旨に沿って、4月、5月にかけてある市の中学校教員に予備調査、6月以降は本調査として面接調査を行った。

## 2.1. 予備調査の概要

### ①調査目的

S 市内中学校教員の、授業改善のための校内研究についての意識を分析するための資料とする。

### ②調査期日

平成 29 年 5 月 6 日(土) 平成 29 年 5 月 21 日(日)

### ③調査対象 S 市内中学校教員 5 名

### ④調査内容

授業改善のための校内研究についての意識を面接調査で聞き取る。

### ⑤分析方法

聞き取った内容をスクリプトにし、概要をまとめてカテゴリー化した。この結果から本調査のリサーチクエスチョンを検討した。

## 2.2. 本調査の概要

### ①調査目的

中学校教員の授業改善のための校内研究についての意識を聞き取り、分析する。

### ②調査対象

市内中学校教員 23 名(若手層 8 名、ミドル層 7 名、ベテラン層 8 名)

### ③調査期日

平成 29 年 5 月期から 8 月期のうち 12 日間。

### ④調査内容

リサーチクエスチョンを①授業改善のための校内研究を通してのこれまでの学び、②感じる課題、③研究を進める上での重点、の 3 つとし、半構造化面接法による面接調査で聞き取る。

### ⑤分析方法

聞き取った内容をスクリプトにし、それをもとにデータを分析する方法として、質的研究方法の 1

つである M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を採用した。

※両調査は、各教員 1 対 1 で勤務校の相談室等の個室で 1 人あたり 20 ～ 40 分程度行った。聞き取りの様子は、各教員の下承を得た上で、ボイスレコーダーで記録した。面接内容は書面にて本人の了解を得た上で録音した。

## 2.3. 調査データの分析方法

スクリプトをもとにデータを分析する方法として、質的研究方法の 1 つである M-GTA を採用した。木下（2003）によれば、この研究方法は教育や介護をはじめとした社会的な相互作用が存在する場において、現実の実践的課題への対応に有効であるとされている。また市内中学校の校内研究について独自の理論生成が可能であり、それは課題解決方法を検討するために必要なものである。よって本研究において M-GTA は適切であると考えた。手順としては、1 人分のスクリプトについて、その人物が授業改善に取り組む上で必要な要素であると考えている部分を抽出して、概念抽出を行った。2 人目以降のスクリプトも同じように部分的に抽出をし、それが既成の概念に当てはまるかどうか検証し、そうでない場合は新しい概念として抽出した。さらに抽出した概念を整理するためにカテゴリーを抽出した。概念については具体的な発言内容をもとに定義づけし、どのような意味があるのかを明確にした。抽出したカテゴリーと概念は、発言内容と教員を含めて表にまとめ、研究者と共同で分析をし直しその正当性をより確実なものにした。

表 1 予備調査で抽出されたカテゴリーと概念のリスト

	A 教諭	B 教諭	C 教諭	D 教諭	E 教諭
校内研究への意識や意義に関する語り	○		○		○
研究協議に関する語り	○	○	○	○	
他の業務との両立による負担に関する語り	○	○		○	
研究の運営に関する語り		○			
管理職・研究主任に関する語り					○

## 2.4. 調査データの分析結果

その結果、5つのカテゴリと15の概念を抽出した(表2))。

## 3. 質問紙調査

面接調査ではS市の中学校教員23名を対象として行った。その回答内容はプロトコル化

し、分析結果の整合性を上げるため3人で分析を行った。しかしS市には中学校が30校以上あり、教員数も1000人を超えることから、面接調査のみでその内容の整合性を担保することには限界がある。

また面接調査の分析だけでは、各カテゴリと概念の相関関係の強弱の違いを提示するまでには至らなかった。それぞれの結びつきの強さに違いはあるのかということを明らかにする必要がある、そのための手立てとして、面接調査とM-GTAによる分析結果について、質問紙法による意識調査から検討を行う。

### 3.1. 質問紙調査の概要

#### ①調査目的

面接調査内容の分析によって抽出したカテゴリと概念に対して、S市の中学校教員がどれだけの意識を持っているのかを調査すること、また

表2 本調査で抽出されたカテゴリと概念のリスト

カテゴリ		概念名	定義	発言した 教員の記号
同僚性 カテゴリ	1	情報交換がしやすい 同僚性	教材研究に関する情報交換が多く、自分が困っていることを相談できるような関係性が必要であること	abghijkqsuw
	2	若手教師との関係性	若手教師の努力や困っている様子から刺激を受け、協力する意欲がわくこと	chj
	3	属性の違い	教科や年齢などの属性が違っても意見を言い合える関係性	bcefmoptsw
	4	研究テーマの共通理解	研究テーマを共通理解し、それに向かって同じ方向で研究を進めていく姿勢が必要であること	dfgijptvs
研究体制 カテゴリ	5	研究業務における 負担軽減	公開授業における指導案作成、研究紀要の作成など物理的・時間的な負担の軽減	adjnopqt
	6	他の業務との両立	担任業務、生徒指導、部活動指導などほかの業務と両立できること	dhloqvuw
	7	授業公開における工夫	授業公開を頻度を上げたり、公開者を意図的に選んだりする工夫により、研究の方向性を安定させること	cjl
	8	会議時間等の設定	授業検討会や研究協議をするための時間、小規模な公開授業の参観者をあらかじめ設定しておくこと	lot
研究協議 カテゴリ	9	研究協議の内容・ 進め方	協議の中で意見の内容に偏りをなくし、誰でも意見を言える雰囲気を作ること。参観の視点を明らかにすること。内容を工夫すること。	cdhklnoqrts
	10	意図の表象の重要性	研究協議では授業者の意図を十分に引き出すことが重要であるということ	ct
管理職・ 研究主任 カテゴリ	11	管理職の働きかけ	管理職によるリーダーシップ・バックアップ・同一歩調の姿勢	dfgij
	12	研究主任の働きかけ	研究主任によるリーダーシップ・バックアップ・同一歩調の姿勢	acdf
効力感 カテゴリ	13	生徒の変容	生徒の学びや表情に変容が見られることが研究における効力感につながる	abefjntuv
	14	研究テーマへの やりがい	研究テーマの必要性、研究することの楽しさを感じる必要があること	bemou
	15	教員自身の学び	教員自身に学びや気づきがあることで、やってよかったと思えること	aehiklmnoqw

それぞれの結びつきの強さに違いはあるのかという  
ことを明らかにすることを目的とする。

②調査期間

平成 29 年 10 月 19 日～11 月 10 日

③調査対象

S 市の中学校 37 校を対象として、校内研究主任  
や校内研究グループのメンバーなど、校内研究に  
関わっている、又は関わったことのある、各学校  
5 名程度の教員。選定は校長に依頼した。

④調査内容と手続き

32 項目からなる「S 市の校内研究に関するアン  
ケート」と題された調査票を対象者に 5 件法で実  
施する。この調査を通して、各質問に対して中学  
校の教員が重要だと思っているかどうか、分析す  
ることで明らかにする。面接調査によって生成さ  
れた概念に関する 17 項目に加え、相関関数の算  
出や因子分析を行うことを踏まえて、同じカテゴ  
リーに基づいてダミーとなる 15 項目を用意する。  
各項目の質問について、5 件法で回答してもらう。  
S 市総合学習センターに依頼をし、中学校校長会  
に質問紙の内容を提示する上で調査の実施を提案  
していただく。承認後、調査依頼書と質問紙を総  
合学習センターより市内全中学校に送付する。回  
答後は匿名性の保持のため個別の封筒に入れても  
らい、それらをまとめて総合学習センターへの返  
信を依頼した。調査の結果は、Excel と SPSS に  
よって、統計解析を行う。

### 3.2. 調査データの分析方法

回答は、37 校に送付したもののうち 34 校（回収  
率 91.8%）、57 名の教員から回答を得て、有効回  
答数は 157 であった。Excel 2010 による統計解析  
により、項目ごとに平均値と標準偏差を算出し、教  
員の校内研究についての意識について、比較・分析  
した。その後、32 項目全てについて SPSS (ver.24)  
による因子分析（主因子分析・プロマックス回転）  
を行った。そこで抽出された各因子を、従属変数 1  
因子に対してそれ以外の因子を独立変数とし、すべ  
ての因子を従属変数として、ステップワイズ法を用  
いて重回帰分析を行った。

### 3.3. 調査データの分析結果

Excel による統計解析の結果、面接調査の語りの  
内容から生成した概念に関する項目のほぼすべて  
（17 項目中 16 項目）において、平均値が 4.20 を  
上回った。SPSS による因子分析の結果、8 因子が  
抽出された。さらに 8 因子にタイトルをつけ、それ  
ぞれの因子間の相関分析（主因子分析・プロマッ  
クス回転）を行った。これらの分析をもとに、教員の  
校内研究への意識をさらに考察した。因子名は、第  
1 因子を「対外的な意識」、第 2 因子を「多面的な  
働きかけ」、第 3 因子を「課題解決のための協同的  
姿勢」、第 4 因子を「授業公開の計画調整」、第 5 因  
子を「研究協議」、第 6 因子を「研究の方向性の共  
有」、第 7 因子を「効力感」、第 8 因子は「研究への  
支援体制」と、それぞれ命名した。

因子分析で抽出された 8 つの因子について、相関  
係数を算出した。その結果、第 2 因子「多面的な働  
きかけ」は、第 4 因子「授業公開の計画調整」とや  
や強い相関（ $r=0.525$ ）、第 5 因子「研究協議」と中  
程度の相関（ $r=0.424$ ）、第 7 因子「効力感」と中程  
度の相関（ $r=0.424$ ）を示した。第 4 因子「授業公  
開の計画調整」は第 7 因子「効力感」と中程度の相  
関（ $r=0.433$ ）を示した。

SPSS による重回帰分析の結果、「授業公開の計  
画調整」には「課題解決のための協同的姿勢」（ $\beta$   
= 0.242）が有意であり、正の影響を与えているこ  
とが示された。「研究協議」には「多面的な働きかけ」  
（ $\beta$  = 0.242）が有意であり、正の影響を与えている  
ことが示された。「効力感」には「授業公開の計画  
調整」（ $\beta$  = 0.235）が有意であり、正の影響を与え  
ていることが示された。「研究への支援体制」は「課  
題解決のための協同的姿勢」（ $\beta$  = 0.297）が有意で  
あり、正の影響を与えていることが示された。



表3 校内研究に対する教員の意識の因子分析の結果  
回転後の成分行列 a

		成分							
		1	2	3	4	5	6	7	8
<b>第1因子 対外的な意識</b>									
項目30	研究の内容を研究紀要等にまとめ、研究がかたに残ること。	0.863	0.092	0.086	0.053	-0.008	-0.102	-0.016	-0.083
項目31	勤務校が校内研究の充実している学校として評価されること。	0.771	0.085	-0.030	0.235	-0.111	-0.064	-0.014	0.091
項目29	研究を他校や外部機関などに積極的に公表すること。	0.621	0.199	-0.155	0.129	-0.137	-0.086	0.301	0.009
項目12	勤務校が研究指定校になることで研究への意気込みが高まること。	0.533	-0.068	-0.036	0.505	0.045	0.055	-0.087	-0.139
項目32	勤務校が校外の研究会や研修に出やすい環境をつくっていること。	0.444	0.014	-0.313	-0.078	0.242	0.181	0.304	0.099
<b>第2因子 多面的な働きかけ</b>									
項目22	管理職によるリーダーシップやバックアップ等の働きかけ、同一歩調の姿勢。	-0.049	0.877	0.003	-0.040	-0.003	0.227	-0.178	0.115
項目23	研究主任によるリーダーシップやバックアップ等の働きかけ、同一歩調の姿勢。	0.098	0.847	0.173	-0.319	0.032	0.149	-0.026	-0.056
項目25	外部から招く研究者によるリーダーシップやバックアップ等の働きかけ、同一歩調の姿勢。	0.124	0.769	0.026	-0.053	-0.086	-0.085	0.135	0.024
項目24	指導主事によるリーダーシップやバックアップ等の働きかけ、同一歩調の姿勢。	0.116	0.694	0.029	0.108	0.219	-0.098	-0.146	-0.053
<b>第3因子 課題解決のための協同的姿勢</b>									
項目2	行き詰まりや困りごとのある若手教師に、周りの教師が協力する意欲を持つこと。	0.035	-0.098	0.712	0.041	0.150	-0.002	0.182	0.062
項目4	ベテラン教師が授業改善に関する指導・助言を積極的に行うこと。	-0.103	0.141	0.706	0.277	-0.086	-0.029	0.039	-0.018
項目1	教材研究に関する情報収集や交換で、困っていることを相談できる同僚がいること。	0.103	0.048	0.696	-0.094	-0.122	0.299	0.029	-0.054
項目3	研究テーマに関する専門的な知識を持つ教師が、知識を提供すること。	-0.192	0.099	0.689	0.128	0.134	-0.221	0.216	0.010
項目8	教材準備を協力して行うことのできる同僚がいること。	0.031	0.123	0.407	0.049	0.064	0.156	0.104	0.214
<b>第4因子 授業公開の計画調整</b>									
項目16	公開授業における、授業公開者と授業を行う学級の決定を入念に行うこと。	0.144	-0.242	0.163	0.823	-0.071	0.057	-0.301	0.131
項目15	公開授業に他校からの多くの教師に参加してもらうこと。	0.243	-0.083	0.098	0.728	-0.087	-0.173	0.129	0.048
項目14	互いの授業を見合う場合、参観者、事前・事後協議会の日時をあらかじめ決めること。	0.127	0.120	0.143	0.571	0.146	0.156	-0.269	-0.239
項目13	互いの授業を日常的に見合うことで研究テーマへの意識を持続すること。	-0.012	0.034	-0.027	0.468	-0.092	0.480	0.180	-0.245
項目21	小学校など異校種の教師にも研究協議に参加してもらい、内容を充実させること。	-0.055	0.315	-0.095	0.419	0.085	0.060	0.136	-0.006
<b>第5因子 研究協議</b>									
項目18	授業の研究協議では協議の視点を明らかにし、焦点づけること。	-0.067	0.036	-0.006	-0.063	0.845	-0.142	0.119	-0.272
項目19	研究協議では授業者の意図を十分に引き出して明確にすること。	0.041	0.136	0.051	0.011	0.773	-0.054	-0.167	0.004
項目20	研究協議では参加者の誰もが意見を言えるようにすること。	-0.130	-0.017	0.048	0.061	0.706	0.143	-0.036	0.232
項目17	授業の研究協議では批判やほめ合いだけで終わらないこと。	0.416	-0.275	0.134	-0.150	0.458	0.147	0.083	0.142
<b>第6因子 研究の方向性の共有</b>									
項目6	研究テーマを共通理解し、同じ方向性で研究を進めていけるように同僚関係を作ること。	-0.108	0.144	-0.103	-0.004	-0.059	0.737	0.223	0.084
項目5	教科や年齢などが違っても、意見を言い合える同僚との関係を作ること。	-0.009	-0.004	0.201	-0.013	0.109	0.631	0.045	-0.058
項目7	研究テーマに対する各教師の意見や想い・解釈を尊重すること。	-0.045	0.025	0.035	0.190	-0.208	0.523	0.064	0.423
<b>第7因子 効力感</b>									
項目28	教師自身に学びや気づきがあることが研究を行ってよかったという気持ちにつながる。	-0.054	-0.183	0.208	-0.025	0.019	0.246	0.881	-0.163
項目27	教師が研究テーマの必要性、研究することの楽しさを感じる。	0.179	0.027	0.174	-0.226	-0.081	0.063	0.849	-0.075
項目26	生徒の学びや表情に変容が見られることが教師の効力感につながる。	-0.181	0.017	-0.186	0.370	0.283	0.194	0.306	-0.002
<b>第8因子 研究への支援体制</b>									
項目10	担任業務、生徒指導、部活動指導など、ほかの業務と両立できる体制を作ること。	0.007	0.072	-0.079	-0.016	0.109	0.056	-0.311	0.792
項目9	公開授業における指導案や研究紀要の作成などの負担を軽減すること。	-0.020	-0.041	0.101	-0.046	-0.191	0.044	0.009	0.780
項目11	研究テーマに関する専門書を、職員室内に多数置くこと。	0.019	0.113	0.097	0.210	0.119	-0.232	0.221	0.445

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 9回転の反復で回転が収束しました。※は反転項目

表 4 校内研究に対する教員の意識の  
相関関係 (N = 157)

成分相関行列

	第1因子 対外的意識	第2因子 多面的働きかけ	第3因子 課題解決のための協同的姿勢	第4因子 授業公開の計画調整	第5因子 研究協議	第6因子 研究の方向性の共有	第7因子 効力感	第8因子 研究への支援体制
第1因子 対外的意識	1	0.302	0.158	0.287	0.321	0.303	0.244	0.129
第2因子 多面的働きかけ	0.302	1	0.234	0.525	0.424	0.182	0.424	0.202
第3因子 課題解決のための協同的姿勢	0.158	0.234	1	0.142	0.301	0.336	0.089	0.228
第4因子 授業公開の計画調整	0.287	0.525	0.142	1	0.343	0.125	0.433	0.198
第5因子 研究協議	0.321	0.424	0.301	0.343	1	0.369	0.370	0.241
第6因子 研究の方向性の共有	0.303	0.182	0.336	0.125	0.369	1	0.181	0.096
第7因子 効力感	0.244	0.424	0.089	0.433	0.370	0.181	1	0.247
第8因子 研究への支援体制	0.129	0.202	0.228	0.198	0.241	0.096	0.247	1

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

#### 4. 「校内研究推進メカニズム」の提案

意識調査の結果と作成した相関関係図をもとに、「校内研究推進メカニズム」を生成した。(図1) 各要素は面接調査で抽出したカテゴリー、概念と、因子分析による因子分けの文言をもとに作成した。枠取りは各因子に対する教員の意識の高さの順に、丸型四角、角型四角、丸の3種類の枠を使用し。字体にも差をつけた。丸型四角の中でも、意識調査から教員の意識が最も高いのが「効力感」であったため、これについては四角内に色を付けた。矢印の濃度は、面接調査をもとに分析した各要素の相関関係に対する教員の意識の高さをもとに3段階に分けた。また太さは因子分けの文言をもとに算出した相関関係をもとに4段階に分けた。例えば【効力感】と【多面的働きかけ】については、面接調査では両者の相関関係についての語りが見られなかったが、因子分析においては中程度の相関があったため、薄くてやや太い矢印を描いた。このモデルを意識し

て1つの要素を改善させることが、それと相関関係のある次の要素に作用し、その連続で各要素が循環的に改善されていくのである。出発地点はどの要素からでも可能であり、自校の研究の中で課題となっているところを改善することから始めるとよい。ただ「研究協議」と「多面的働きかけ」の2つの要素については、多くの他の要素と相関がある。よって「まずどこから改善すべきか」と迷う場合にはこれら2つの要素の改善から取り組むと効果が期待できるであろう。

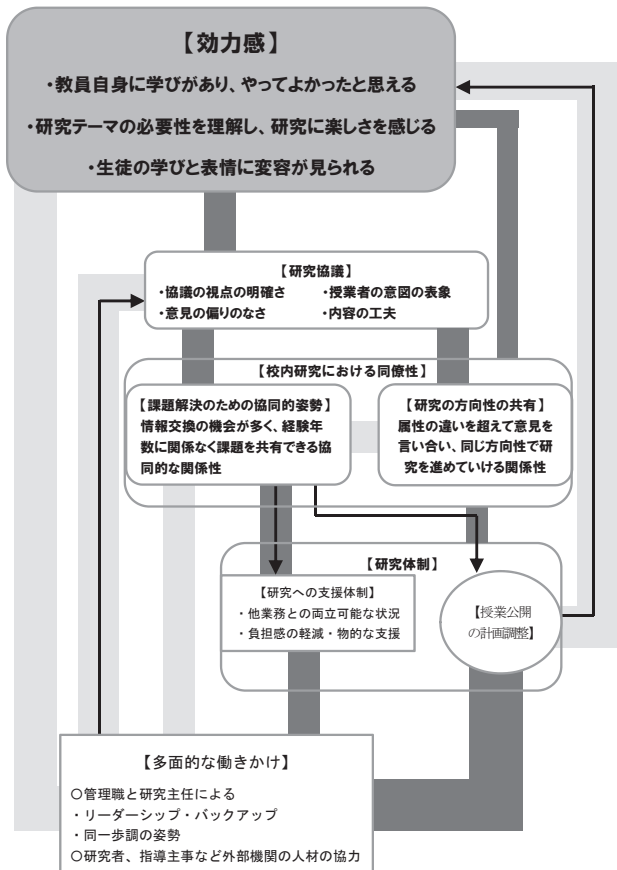


図1 「校内研究推進メカニズム」

## 5. 具体的な手立ての考案と提案

次に、生成した「校内研究推進メカニズム」を好循環させ、中学校における校内研究を充実させるための具体的な方法を提案する。その手段として、系統図法を活用することとした。この方法は、達成すべき目標に対する手段を多段階に展開することで、具体的に実行可能な手段を得るための方法であり、会議の議事録のキーワード等から取り組むべき課題や改善する手段、問題の原因を解消する対策を発見するために適した方法である。中学校教員にとって実践可能な手立てを提案することを目的としているため、この方法は適していると考えた。参与観察と先行研究から、提案の一部を掲載する。

### 5.1. 情報交換を促す会話のしかけ

情報交換をすることに必要性を感じている教員は、そのことで新たな発見を得たり教授方法の広が

りにつながったなどの経験を経ている傾向があった。このような経験が語りの中で出てくる教員は、情報交換をすることが研究の活性化につながるとともに自身の学びにつながるという考えを持っていて、多くの教員がそのような経験をすることで情報交換がしやすい環境が作られると考えている。

強調したいのは、他の教員同士の会話を耳にすることもまた情報交換方法の1つであるということである。教員の学びとは教員集団の中で授業改善を行うことで学校改善、学校経営に参画する過程において発生する。その学びは周りの教員との意識的な、あるいは無意識レベルのコミュニケーション、つまり会議や研究協議、職員室における会話など、によって発展するとともに、互いの考えを受けとめあえるような同僚性を高める。

手立てとしては、情報交換の場を増やすためのしかけを作ることである。他業務との兼ね合いもあるためタイミングを選ぶ必要性はあるが、意図的に研究テーマに基づく情報についての会話を増やすということが考えられる。例えば研究推進委員会のメンバーが共通意識のもとで、普段の業務の中で会話を広げたり、ベテラン教員が今まで積み重ねてきた経験からアイデアを提供する機会を増やす、などといった手立てが考えられる。

また情報交換において大切なのは、自分が現在困っていることをいかに発信できるかということである。自分の弱さや経験不足を認め、困りごとを発信できるということが個人と組織にとって成長のきっかけとなる。抱える課題を共有できるのは、教員間だけでなく、研究者もその対象の1人である。課題解決に向けて、その課題を研究者と共有することは、教員間での共有とはまた違った効果も期待できる。

### 5.2. 若手教員への教育実践の継承

新学習指導要領改訂（平成29年）のポイントの中にある文言である「我が国の教育実践の蓄積」、「既に行われている優れた教育実践」という言葉に着目すると、経験豊富なベテラン教員による知識や教授方法などの継承が必要である。このことについて、

神奈川県小田原市のある中学校での校内研究発表を考察する。平成 29 年 10 月 26 日（木）に行われた校内研究全体会では、5 校時に各学年 1 クラスずつで公開授業を行うため授業者が 3 名選出された。その 3 名はいずれも総括教諭兼各学年主任であり、年齢的にもベテラン教員の域なのである。事前に A、B、C の 3 つのグループに分かれ、各グループには若手・ミドル・ベテラン教員がバランスよく配置されていた。公開授業当日までに各授業公開者は、同じグループの教員と指導案を検討し、それをもとに他のクラスでも授業を行って指導案の改善に生かした。内容を大幅に変更したグループもあったようであるが、教員同士の協力のもとで改善を積み重ねて公開授業当日を迎えた。道徳の授業が 3 クラスで行われ、その後研究協議を行った。付箋を使った研究協議では年齢の違いに関係なく良かった点や改善点などが議論され、属性の違いを感じさせないほどの建設的な議論であった。決して褒め合いだけで終わることなく、ミドル教員からの改善案を授業者が真剣に受け止める場面も見られ、若手、中堅、ベテラン教員が対等な関係を保ちながら協議を行っていたのである。また参観に訪問した 3 名の指導主事も協議に加わり、教員と同じ目線で意見を述べていた。全体会の最後に教務主任教諭は、「今回はベテラン教員に授業を公開していただいた。ぜひ今後に生かしてほしい。」と、この公開授業の意図を伝えた。

これは、これまでの「教育実践の蓄積」を若手教員にストレートに伝承することを実践した授業研究の例である。このように授業公開者を意図的に選ぶことが、若手教員の学びの場を作るきっかけの 1 つとなる。さらに、この実践を行った時期、10 月というタイミングにも注目したい。年度が始まって約半年が過ぎている 10 月とは、個々の教員の課題がだいぶ明らかになる時期である。そこでは学校行事や夏休みも終わり、日々の授業が軌道に乗ってくると同時に、もう一歩前進した授業展開方法を知りたいと、授業改善に関する学びを吸収したいという気持ちが現れるようなタイミングである。新しい学びを受け入れるに十分な課題意識が発生している中でベテラン教員による授業実践は、他の時期に行う

よりもより効果を発揮したのではないか。そのような状況で若手教員はインスピレーションを受け、ベテラン教員は若手教員の成長に喜びを感じるとともに自分もさらに成長したいという意欲が引き出される。その結果、それぞれの教員自身が自分の成長を実感することで喜びを感じる。成長を実感した若手教員は、自分に後輩ができたときやベテラン教員になったときに、今度は自分が若手教員を育てたいという気持ちがわいてくるであろう。

### 5.3. できることの提供

校内研究とは、研究テーマに沿った授業の実現の 1 つの例として今ある知識を提供するという「今できることの提供の場」でもある。できることの提供は、授業公開以外にも様々な場面において可能である。実践例を考察する。

新潟市立白新中学校では、授業改善を目的とした校内研究において、同僚性と協同性を育むことを重点の 1 つとして掲げている。その上で、校内研究のプログラムの一環として「自己選択研修チーム」を立ち上げて、教員による自主的な研修を自分たちで考案して行っている（図 2）。

チーム名	研修内容	研修の成果の共有
FT チーム	ねらいに応じた FT のグループ化	研推だよりで共有
UD チーム	白新授業 UD の発展	9 月 7 日 UD 研修の運営・実施
ICT チーム	ipad 使用の推進・環境整備	9 月 7 日 ICT 研修の運営・実施
道徳チーム	議論する道徳に向けて	2 月に職員研修実施予定

図 2 自己選択研修の詳細

学んだことをもとに研修を企画して運営する研修で、周りの教員に対して「できること」としての提供となる。教員の動機づけを高めるとともに、自分の研修が他の教員の役にも立っているという効力感、研修を行うことによる自身の学びの再構築にもつながるのである。自分ができることを生かして校内研究に対するモチベーションを上げるために有効な事例である。



#### 5.4. 研究主任としての働きかけ

面接調査において複数の教員から同一の研究主任についての語りを聞いた。この人物に焦点を当てて研究主任の働きかけについてより具体的に聞くことができそうであったため、追加のインタビューを行った。その結果、次のような働きかけが実践されていることが分かった。「校内研究推進メカニズム」との関連性を踏まえてその本質的な効果をまとめ、次のように整理した

##### ①個人レベルで研究協議の効果的な運営方法について学んだこと

研究主任自身の学びになることはもちろんであるが、研究を推進する立場がそうすることで、研究活動全体にも影響を与える。教員の研究協議における学びが促進され、学びが深く内面に刻まれることにつながる。この効果を教員が実感したとき、研究主任自身の努力にも気づき、研究主任に感謝や尊敬の念がわき、リーダーシップを受け入れようという気持ちが生まれた。

##### ②研究テーマの文言1つにおいても議論を重視したこと

このことで周りの教員とのコミュニケーションを十分に図って同一歩調の姿勢を現した。そしてこの議論が教員からの意見の吸い上げとなり、「ミドルアップ・ダウン」の要素の一部となったこと。中間の立場がただ情報を行き来させるのではなく、議論の中で熟成された提案を「アップ・ダウン」することで、提案内容がより有力なものとなり、組織の中で円滑に流れる。議論が組織運営においていかに重要か理解できる部分である。

##### ③研究推進委員会の構成員を企画会のメンバーと同一にしたこと

推進委員会を効率よく定期開催してその中のチームワークを維持しつつ、建設的な議論を行うことができた。このことは②と同じような、提案内容とそれが組織の中で流れる上での好作用につながっている。

##### ④各学年会において授業改善に関する話題を確実に取り上げたこと

教員の授業改善に関して語る場を設けて意識を継

続させた。またこのことにより研究推進委員会が、管理職・研究主任と教員との連携を図るための「ミドルアップ・ダウン」としても機能した。特に研究推進委員会から学年会への提案という場面においては、学年主任の提案力だけでなく、ある程度発言の自由度が保障された会議の中での語り合いということも、提案内容が組織内を好循環するための要素となっている。

##### ⑤校内公開授業の頻度を増やすという方針を明確に出して実行したこと

このことも全教員の参画意識を高めたが、ただ頻度を増やせばいいということではない。①～④の取り組みを通して教員1人1人の研究への意識が高まり、研究に向かう強い意識を基盤とした同僚性が築かれている状況は、効力感の高まりと多忙感を軽減にもつながる。そのことが公開授業の頻度を増やすという提案への賛同の気持ちを後押ししているということである。

##### ⑥教科横断的な授業展開をテーマに取り上げたこと

他教科の教員同士が授業改善に関わる機会を増やした。このことが研究目標の提示というリーダーシップとして効果を発揮したとともに、教員同士のチームワークが向上するとともに生徒の変容にもつながった。

##### ⑦年度当初の公開授業を研究推進委員が行ったこと

このことで研究の方向性を自ら示して教員間の共通理解を図ることができた。この姿勢により、教員が研究推進委員からの方針、リーダーシップを受容しようという意識を持てたのである。研究推進委員という肩書ではなく、その立場としての行動が周りの意識に作用するということが分かる具体的な事例である。言葉だけではなく、姿勢、行動、授業力で研究の方針を示したということである。

##### ⑧他教科の教科書も見て教材研究できるように備品をそろえたこと

物理的な環境を整えることも、研究活動の効率化につながる。

##### ⑨指導主事との連携を密にしたこと

学校外からの情報収集に努めるとともに同僚性に専門性の高さを加えた。研究の意識が高まる中で専

門性を向上させる機会が生むことは、教員による研究へのベクトルをより一層強めるのである。

### 5.5. KPT 法による振り返り

KPT 法は、これまでの自分たちの活動を振り返り、Keep（良かったこと、続けたいこと）、Problem（問題、不具合）、Try（新たに取り組みたいこと）の所見を、ブレインストーミングの要領で、できるだけ多く挙げるフレームワークである。これら3点について、5人程度のグループを作ってワークショップ形式で行う。長机や生徒用の机でグループを作って行うのが一般的だが、机を使わず円になって座って行う実践も見られた。順番としては、K→P→Tの順で考え、それぞれをブレインストーミングの要領でできるだけ多く挙げ、用紙等（図3）に協議内容をまとめる。この方法のメリットを「校内研究推進メカニズム」と照らし合わせた上で考えると2つある。1つは、この協議自体が情報交換の場にもなっていることである。もう1つは、肯定的な視点で自分たちの研究経過を認識したうえで、次年度の研究の方向性を検討できることである。

Keep( 継続したいこと )	Try( 挑戦したいこと )
Problem( 課題 )	

図3 KPT 法で使用する用紙の例

## 6. 成果と課題

本研究では、面接調査と質問紙調査の質的および量的研究によって、中学校教員に対して2つの意識調査を行い、授業力改善のための校内研究を充実させるための条件と要素を抽出した。そして、各要素の相関関係の分析をもとに、各中学校において校内研究の充実のための一助となる「校内研究推進メカニズム」を提案した。

しかし、教員の学びと生徒の学びについては深く

関連付けることができなかった。授業改善は、教員の授業力向上という目的もあるが、最終的には生徒の学力と学びの質の向上に結び付けなければならない。今後の課題として、実際に生徒との関わりの中で授業改善のための校内研究を推進しながら、教員と生徒、それぞれの学びを相互作用させながら高めていくことに軸を置いて研究を進めていく。

また、特定の中学校の現状と課題に沿って、より具体的な校内研究の充実のための手立てについて研究を進めていくことも課題である。本研究は、1つの市に絞ったうえでの研究であるが、今後はこの研究を1つの中学校というより小規模の枠組みに当てはめ、地域性やその学校独自の教員間の同僚性などより具体的な現状と課題と照らし合わせ、各学校における校内研究の発展につなげたい。

### 【引用文献】

- 注1. 脇本健弘「教師をめぐるきょうの状況 — 社会背景」、『教師の学びを科学する データから見える若手の育成と熟達のモデル』中原淳監修 町支大祐 著 北大路書房、2015年（第1章 pp.1～14）
- 注2. 坂本篤史「授業研究の事後協議会における教師の省察過程の検討 —授業者と非授業者の省察過程の特徴に着目して—」『教師学研究 8・9』 pp.27～37 2010年
- 注3. 杉江修治、水谷茂『教師の協同を創る校内研修 —チーム学校の核づくり—』ナカニシヤ出版 2017年

### 【参考文献】

- 坂本篤史「授業研究を通じた小学校教師の授業を見る視点の変化 —授業研究に携わった経験に対する M-GTA を用いた教師の語りの分析—」『教師学研究第10号』、2011年
- 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂、2003年